

# 足利義満の相国寺建立について

今 枝 愛 真

一

足利氏と禅宗との関係についてはすでにしばしばのべてきたが、

(1)この両者の関係が一つのピークに達したのは、いうまでもなく義満の時代である。したがって、この時期に義満によって幕府の東隣に創建された相国寺が、等持寺にかわる足利氏の菩提寺として、室町幕府と最も緊密な関係をたもち、尔後の五山禅林の枢府として、五山派全体にとってきわめて重要な地位を占めるにいたったことは周知のごとくである。しかるに、何故か同寺の創建についてはこれまで考察を加えたものをみない。そこで以下その成立事情等について、いささか検討を加えてみたいと思うのである。

註(1)拙稿「安国寺利生塔について」(『史学雑誌』七一ノ六)

同「禅宗と足利初期政権―等持寺の成立をめぐる―」(『日本歴史』一七一)

同「五山の官寺制度」(『歴史地理』八十七ノ三・四合併号)

同「禅宗の官寺機構―五山十刹諸山の国別分布について」(『日本学士院紀要』一九ノ三)

同「斯波義将の禅林に対する態度―とくに春屋妙葩との関係について―」(『歴史地理』八十六ノ二)

同「鹿苑僧録の成立とその沿革」(『日本仏教史』一、二、三)

二

それには、まず義満がどのようにして新寺を創建しようとするにいたったかという過程からみなければならぬであろう。

これよりさき、永徳二年六月十四日、後光厳上皇の典侍岡松一品尼、すなわち日野宣子が逝去した。法名を大聖寺無相 円禅尼という<sup>(1)</sup>。生前の宣子ととくに親交のあった義満は、その歿後の仏事一切を宣子から委嘱されていたので、翌日正覚寺において茶毘に付した。これには、下火春屋妙葩、鎖籠清溪通徹、起籠蘭州良芳、奠茶起山師振、奠湯相山良永、念誦不遷方序、以下千余名の五山禅僧が参加して諷経行道するなど、きわめて盛大な葬儀が営まれている。

(2)ついで十八日には、義堂周信が起骨仏事を行い、聖一派の秀峰尤奇が開いた安聖寺に遺骨を安置し、同寺を中陰道場にあて義満もここに移り、自ら斎戒精進して金剛経を浄書している。<sup>(3)</sup>のみならず、この後も義満は同寺に滞留したまま、連日、義堂周信をはじめ、古劍妙快・太清宗渭など五山の禅匠をまねいて、法華経・円覚経・大恵書・楞嚴経などの講義をうけ、自らも禅衣をまとい、坐禅・禅誦・写経・道話するなど、さながら禅僧のごとき生活をおくり、

ひたすら宣子の菩提を弔っている。(4)さらにこの間に、五七日忌(5)・七七忌のために、洛外等持院において千僧会を設け、こうして大練忌が終了した七月十九日夜、はじめて室町邸に帰っているのである。(6)

さらにこの後も、毎月の忌日にはかさず安聖寺に赴いて、宣子の仏事法要を行っており、義堂の楞嚴經の講義などは、その晩年にいたるまで続けられている。(7)また百ヶ日忌には、等持院で千僧会を行い、各宗の僧侶を招待して法華懺法を修し、(8)一周忌には華嚴・法華・楞嚴・楞伽・金剛の諸經を印写し、円覚・法華兩經を書写するなど、まことに鄭重をさわめた供養をとり行っていることが知られるのである。(9)このように、足利氏の一族と同様の取扱いで、足利氏の墓所のある等持院でしばしば仏事を営んでいるところをみると、あるいは同院に葬られたのではなからうかと推測される。

ともあれ、義満が宣子から死後の万事を委嘱されていたにせよ、このように親身も及ばぬ鄭重な追善供養を行って、宣子のために尽しているのは何故であろうか。この点については、さきに後光厳上皇の有力な典侍であった日野宣子が、その下で新典侍となっていた姪の日野業子(時光の女)を、義満の正妻に斡旋したという特別な関係があったことがまず考えられる。(10)しかし、ただそれだけの理由で、その恩誼に酬いるために、上述のような手厚い供養を行ったということではなさそうである。

これより先、応安三年ごろ、前右大臣西園寺実俊の側室で、後光厳天皇の典侍となっていた宣子は、天皇の第一皇子、すなわち後の後円融天皇の室に三条公忠の娘嚴子を入れるため内密に種々斡旋をしている。(11)また、このころの後光厳上皇の御所は、宣子の里であ

る柳原の日野大納言時光邸があてられていたばかりでなく、(12)上皇は宣子の息女を寵愛して、しばしば西園寺実俊の北山邸に通われているほか、(13)宣子の息女の一人は右大臣九条忠基の妻になっているなど、(14)日野宣子は当時官廷及び公家の間に隠然たる勢力を持っていたことが知られる。したがって、義満が次第に官廷内での発言力を増し、永徳元年六月内大臣、ついで翌年正月右大臣に昇進するなど異例の出世をとげ、公家社会の実権をにぎっていくことができるようになったのは、(15)宣子の庇護とその斡旋によるところが多かったのではなからうか。永和四年三月十日、義満が移った室町第も、もとは崇光上皇の仙洞御所として足利義詮が献上したものであるが、永和三年二月十八日の火災で焼失した後、義満が申請して新第を造営したもので、これなどもおそらく宣子の斡旋によったのではなからうかと推測される。(16)このように、義満が着々官廷に勢力を占めるようになったのは、ひとえに宣子の力に負う処が多かったと思われ、このようなところから、その恩誼に酬いようとして、義満は鄭重に菩提を営む心境になったものであろう。

ところで、このように、日野宣子の死を契機として、義満は禅宗信仰を一層深めていったが、この点については、当時その背後にあって、義満の信仰上の指導にあたっていた義堂周信の影響を見逃すことはできない。すなわち、康暦元年天下僧録となり、五山禅林の行政機関の最高責任者となっていた春屋は、(17)翌二年、義堂を鎌倉から呼び戻して、足利氏の家利である等持寺の住持にすえ、もっぱら義満の禅信仰における指導にあたらせていたのであるから、義堂の感化力に負う点がきわめて大きかったことは想像に難くないところであらう。

これよりさき、尊氏以来足利氏の家刹であった等持寺は、三条坊門の幕府邸に隣接していたが、永和四年三月十日、幕府邸が室町に移ってしまったため、等持寺は幕府と離れていた。また、幕府をあげての大仏事を行うには、同寺はあまりにも狭少であったことは、文和元年八月十八日の裏書がある等持寺古図によっても窺われるばかりでなく、等持寺は、もと浄華院と称する向阿上人証賢が開創した浄土宗鎮西派の寺院を足利直義が禅寺に改めたものであったから、<sup>(8)</sup>本格的な禅宗行事を催すにはいろいろと不便な点が多かったであろう。このようなところから、たまたま宣子の供養のために安聖寺にしばしば赴き、禅悦に浸っていた義満は、最初は自分が坐禅工夫をするための小禅寺を建てようと考えていたが、やがて春屋や義堂のすすめによって、等持寺に代るものとして、安聖寺をも含めた理想的な大道場を建立する決意を固めるにいたったのである。このことは春屋や義堂にとってはまさに思う壺であったであろう。たちまちにしてその議はすすめられていった。

註(1)『空華日用工夫略集』三同日及七月二日条

(2)『空華日用工夫略集』三同日条

(3)『空華日用工夫略集』三同日条

(4)『空華日用工夫略集』三永徳二年六月十九日条等

『義堂和尚語録』二。『太清録』等

(5)『空華日用工夫略集』三永徳二年七月二日条

(6)『空華日用工夫略集』三永徳二年七月十九日条

『智覚普明国師語録』

三 陞座下

(7)『空華日用工夫略集』三永徳二年八月十四日条

(8)『空華日用工夫略集』三永徳二年九月廿五日条

(9) 同右

(10)『後愚昧記』永和三年正月十二日条

(11)『後愚昧記』応安四年三月十六日条

(12)『愚管記』永和三年二月十八日条

(13)『後愚昧記』永和三年二月十八日条

(14)『後愚昧記』応安四年三月十六日条

(15)白井信義著『足利義満』

(16) (13)と同じ。

(17)拙稿「鹿苑僧録の成立とその沿革」(『日本仏教史』一、

二、三、)

(18)拙稿「禅宗と足利初期政権——等持寺の成立をめぐる——」

(『日本歴史』一七一)

三

やがて宣子の百日忌がすむと、はやくも九月二十九日には、一禅刹を創立して、これを官寺の十刹の位に列し、僧衆を五十人とするなど、義満は具体的内容を春屋や義堂に提示して、その同意を求めている。(1)ついて十月三日には、春屋・義堂の建議によって、寺号を承天相国と定め、(2)十三日には、五山の長老達によって新寺造営のための評定が行われた。(3)さらに二十一日には、殿堂の大きさ、僧衆の数、修禅弁道の方法などについて、義満はこれを一々義堂に諮っている。(4)このようにして、新寺建立の計画は着々進められ、十月二十九日には、はやくも仏殿・法堂の柱が建てられた。(5)しかし、いかに手際がよかったにせよ、新規の建築がすべてその

ように急速に進捗する筈はなかった。果してそれらのいくつかは、実は旧建造物の移建にすぎなかったのである。すなわち、新寺の法堂は等持院の旧法堂を移管したものであり、⑩のちに建てられた方丈も、畠山基国の寄進によって、五条にあった寝殿を移転したものであった。⑦その他については明らかでないが、以上のごとき事実、創建の進捗をはかるといふ目的からばかりでなく、幕府財政の窮乏下における新寺建立の事情を物語るものといふべきであろう。

さらにまた、新寺の敷地を得るために、近隣の貴賤の人々の屋地が強制的に他所にうつされ、⑧智恩寺などは、一条北小川の地に移されている。⑨このような義満のやり方に対して、一条経嗣などは余程腹にすえかねたとみえ、「近辺敷地等皆以被点之、仍人々多以没落云、末世末法之至極、不能左右、々々々々」といい、或はまた「近辺貴賤遷居於他所、如此事、福原遷都之時之外無例云々」と、その日記にしている。⑩さらに口さがない都人の間では、「ミヤコニハ、ヒノ木スギノ木ツキハテテ、ナゲキテツクル相国寺カナ」とさえ歌われていたのである。⑪義満や春屋らの方針にもとづいて、新寺の建立がいかに強引に進められていったが、よく窺われるであろう。

ともあれ、新寺は、造営経験ゆたかな春屋がその中心人物としてこれに当たったばかりでなく、⑫春屋は、

定番匠木屋条々  
(春屋妙能)  
(花押)

一朝夕出入事、奉行僧堅可点検、或令違次、或不待期、於隨意輩者、報大工可停止寺家出入矣、

一同童部事、号木切取用木之条、非無其費、縦雖為無用木、五寸以上者不可取之、但雖為五寸内、為用木者、不可許之、右、此

条々有違犯之輩者、可処其過、將又奉行僧並行堂力者□(等)、於令見隠者、随聞出可為同罪也、仍所定置之状如件、

永徳四年正月 十一日

という、番匠や木屋に関する規定を厳にした制札をにかけて⑬工事の進捗をはかる一方、番匠大工なども、建築経験にとむ天竜寺の寺大工たちに受持させたので、工事は着々進行し、一時山門の嗾訴などのために、多少遅延はしたものの、やがて十一月二十六日には、ついに五ヶ所の堂舎が創建され、仏殿・法堂の立柱上棟が行われた。⑭

これら本寺の造営とともに、その他の塔頭子院の造営も進められていった。すなわち、聖一派の秀峰尤奇の別業で、宣子の中陰道場となっていた安聖寺を、秀峰の派祖白雲慧暁を開山とする聖寿寺に移して、その安聖寺の旧跡に將軍の休息所である小御所をあらたに建て、安聖寺に隣接していた大宮実尚の屋地などを召上げて、小御所に附属させている。⑮

ところで、このように西園寺の一族である大宮実尚の屋地が安聖寺と隣接していたところから推察すると、同寺は大宮氏と特殊な関係があったということも考えられないではない。しかも西園寺実俊の妾となった日野宣子は、当然西園寺一族の実尚とも昵懇であった筈であるから、宣子も亦、生前から安聖寺と何等かの関係があったということは想像に難くないところである。のみならず、岡松殿、すなわち宣子の屋敷は、新相国寺の山門の南を東西に通ずる岡松通に面しており、安聖寺と近い場所にあったと推測される。あるいは『京都坊目誌』にいうように、はじめ岡松殿は室町第内にあっ

たのかも知れない。このようなところから、宣子の歿後、岡松殿と近いところにあった安聖寺に中陰仏事の道場が充てられたのではあるまいかと推察される。

やがて、永徳三年九月十四日に、この安聖寺の跡に建てられた義満の参禅弁道のための小御所が鹿苑院と改められ、ついで相国寺の檀那塔となり、学徳の誉高い絶海中津が初代院主となり、義堂にかわって義満の修禅弁道の師となったのである。<sup>(16)</sup>

ついで義堂の提案によって、新寺の名称は相国承天禅寺と改められ、<sup>(17)</sup>夢窓疎石を勧請開山とし、春屋自らはその第二世となった。<sup>(18)</sup>その間、南禅・天竜などの開創の故事にならない、義満は自ら土砂を運搬し、管領斯波義将・同義種・畠山基国・山科敦藤・日野資教・同資康・武田・上条・赤松義則・六角満高などの公家武家が普請に参加し、関東の足利氏満・上杉憲方なども造営料を寄進している。<sup>(19)</sup>また、徳叟周佐などは、天竜寺・真如寺・等持院などの僧衆を率いて土木工事に従うなど、新寺の造営は着々と進められた。<sup>(20)</sup>

こうして、至徳元年三月十六日、仏殿立柱会が行われ、<sup>(21)</sup>ついで翌二年十一月二十日、宿願の仏殿が完成し、天竜寺と同様、本尊毘盧舎那仏、脇侍普賢・文殊両菩薩を安置し、南禅寺住持義堂周信を大導師として、その慶讃仏事が盛大に執り行われたのである。<sup>(22)</sup>ここに着手四年にして、南禅・天竜などの大刹に比肩しうる規模と体裁を具えた大伽藍が誕生したのである。ついで同三年七月十日、幕府は南禅・天竜について同寺を五山の第二位に列し、<sup>(23)</sup>ここに相国寺は名実ともに五山の中核としての体裁を整えるにいたったのである。

註(1)『空華日用工夫略集』三同日条

(2)『空華日用工夫略集』三同日条

(3)『荒暦』同日条

(4)『空華日用工夫略集』三同日条

(5)『空華日用工夫略集』三同日条

(6)『荒暦』永徳二年十月三十日条

(7)『吉田家日次記』永徳三年八月六日条

(8)『荒暦』永徳二年十月三十日条

(9)『新撰往生伝』三沙門往生類三

(10)『荒暦』永徳二年十月三十日、同十一月二日条

(11)『玉塵』四十三

(12)『荒暦』永徳二年十月三十日条

(13)拙稿『図説日本文化史』室町時代篇「禅宗」。本文書は天竜寺所蔵であるが、相国寺創建に関するものと推定される。

(14)『荒暦』永徳二年十一月十九日、同二十六日条。

『空華日用工夫略集』三永徳二年十一月二十六日条

(15)『吉田家日次記』永徳三年八月六日条

(16)拙稿「鹿苑僧録の成立とその沿革」上(『日本仏教史』一)

(17)『空華日用工夫略集』三永徳三年十二月二日条

(18)『空華日用工夫略集』三永徳三年十二月十三日条

(19)『空華日用工夫略集』三永徳三年十二月十四日条等

(20)『空華日用工夫略集』三至徳元年二月二十九日条

(21)『空華日用工夫略集』三同日条

(22)『空華日用工夫略集』三同日条。『義堂和尚語録』一

四

このように、最初義満は自らの坐禅工夫のための小寺を考えていたのであったが、春屋・義堂の勧めによって、五山の上位に列せられるような大刹が出来上ってしまった。しかも天竜寺に準じて、本尊は毘盧舎那仏とし、開山には夢窓を勧請したのみならず、新寺の行事札数など、すべて天竜寺の規矩に準拠して議定されたほか、(1)また先述のように、天竜寺の番匠大工を使用している点などといい、各方面にわたって天竜寺の諸性格をとり入れたものであったことがしられる。しかも、天竜寺同様、その僧衆は春屋をはじめとする夢窓門派の主流派が占めたことは勿論である。のみならず、幕府と特殊な関係をもつ等持寺の諸機能をも取入れたのである。その結果、相国寺は、従来足利氏の家刹であった等持寺にかわってその菩提寺となるとともに、京都における夢窓門派の新拠点となり、やがて夢窓派の主流は、天竜寺や臨川寺から相国寺中心に移行するにいたった。こうして相国寺は、足利氏の菩提所であると同時に、幕府の公的な宗教行事を行う大道場としての性格と、夢窓派の拠点としての性格を兼備するにいたったのである。このように、相国寺の創建は、僧録制度の成立について、五山の官寺制度の完備などとともに、五山諸機構整備における最終的段階を意味していたのである。

一方、このような相国寺の創立の背景には、当時の五山の主流派をなしていた夢窓派、とくに春屋とその一派の動向がよく反映していたことも忘れてはならないであろう。すなわち、これよりさき、康暦元年細川頼之の失脚により、斯波義将に支えられた春屋・

義堂らの進歩派は、当代五山禅林の主導権を完全に掌中におさめたが、春屋らと相容れなかった竜湫周沢などは、おなじ夢窓派の中心人物でありながら、新寺の建立には、全く関与しなかったばかりでなく、この後も相国寺とは殆んど交渉をもつにはいたっていないのである。(2)

このようにして、春屋らを中心とした禅林の新傾向の人々は、自分達の新たな拠所を求めていたので、義満に勧めて新寺を創建し、これをかれらの根本道場にしようと考えたのである。こうして、康暦二年、春屋に呼ばれて鎌倉から京都に帰り、義満の信仰上の顧問的立場にあった等持寺の義堂の感化教導によって啓発され、宣子の死去を契機に禅宗信仰に新境地をひらいた義満をして、幕府財政の窮乏にも拘らず、新寺の建立に踏切らせたのであった。

しかしながら、この後同寺を中心にした五山文壇は、その最盛期をむかえるなど、表面的にはきわめて華美な風潮がみなぎっていたかにみられるが、その実、中核たるべき相国の新堂宇等は、他所の旧建築物を転用したものがかなり含まれているなど、そこにはすでに五山の発展における限界が暗示されていたかのごとくである。しかし、相国寺は、足利氏の家刹であると同時に、室町幕府に近接した五山の新しい一大拠点として、足利政権の庇護をうけ、尔後の五山禅林の代表的存在として栄え、やがて鹿苑院も五山の統制機構である僧録の住院となり、これも相国寺の夢窓派の独占するところとなり、ながく五山全体の中心として權威を保ったのである。

註(1)『空華日用工夫略集』三 永徳三年十二月十八日条

(2) 拙稿「斯波義将の禅林に対する態度―春屋妙葩との関係について―」(『歴史地理』八十六ノ二)(文学部 講師)